

## ■「ちくま評論入門」解説——読解問題への過程

## 7 加藤典洋「敗者の想像力——『千と千尋の神隠し』」

●参考 加藤典洋『さようなら、ゴジラたち』【914K58/1】（北野高校図書館）

『日本人の自画像』【210K94/1】（北野高校図書館）

『大きな字で書くこと』【914K58/1】（北野高校図書館）

## ■目標 問いの運動について行く

## ■追跡

加藤典洋は、文芸評論家。二〇一九年に亡くなった。『村上春樹はむずかしい』など村上春樹についての本も多い。読んでみれば、村上春樹の読み方が変わるだろう。戦後論や言語表現についての論考にも重要なものが多い。

- ① 宮崎駿のアニメ『千と千尋の神隠し』（以後、『千と千尋』）は、二〇〇一年七月に封切りされると国内で二〇〇万人を超える観客を動員し、二〇〇二年二月にはベルリン映画祭で金熊賞を獲得、さらに翌〇三年には米国アカデミー賞長篇アニメ賞を受賞するなど、日本だけでなく国外でも多くの観客に迎えられた。しかし、そのドラマトウルギー（ドラマの製作手法）はアメリカのウォルト・ディズニーに代表される漫画・アニメのそれとはだいぶ違う。宮崎自身が、この作品がアカデミー賞にノミネートされたときには、自分の作品は勧善懲悪ではないからアメリカの人に受け入れられにくい、したがって、受賞はないでしょう、と醒めた面持ちで語っていた。別のところで彼はその判断の理由を、「山場を作って手に汗を握らせ、最後には正義が勝つ、というような映画のセオリーを踏めば」、観客の心を掴めるのはわかっている、「けれどもそれでは、どこかの国のテロリストと正義の味方しか知らない世界に生きている人たちと同じことになる。そういう世界観で映画を作る気はさらさらしない。」と、やはり醒めた口調で述べている（養老孟司との対談）。
- ② では、宮崎のアニメは、ディズニーのそれとどこが違うのか。そしてその違いは、どこから来ているのか。

加藤はこのように、問いを立て、自問自答するように論を進めていくタイプ。私たちはついていけばいい。ただし、問いを忘れずに。ドラマトウルギーは、ドラマの製作手法。『千と千尋の神隠し』を観ていることが前提になるが、万一観たことがないというなら、一度は観るとよい。以下ネタバレになるが、しゃあないよな。

③ 『千と千尋』のうちの何が私たちを動かすのか。さまざまに言えるだろうが、そのうち、最深の要素のうちの一つに、こういうことがある。千尋が千になって彼女の二人の親を救う。彼女がさまざまなことを経験し、課題をクリアし、達成する。しかしそれが彼女

の「成長」あるいは社会から「賞賛」されるべき物語に結びつかない。その無償性の問題が、この作品に固有のある見えにくい「感動」の源泉としてある。

ほら、また問いが立つ。問い↓答えを追う。「何が私たちを動かすのか」↓「千尋の達成は、社会から賞賛される物語にならない。賞賛がない。「無償」だということに私たちは感動する」。この「無償性」がキーワードになるだろう。そしておそらくそれがディズニーとの違いと関係するだろう。

④ 無償性とは何だろうか。彼女は、ともに「油屋」の主、湯婆婆の支配する異世界に迷い込み、豚に変身させられた両親を、再び人間の姿に戻し、救い出す。しかし、そのことを彼女の両親は知らない。それだけでない、そのことの記憶を、千尋自身が、その異世界から外に出るときに、保っているかどうか、スクリーン上に見る限り、はっきりしない。この映画はそんなふうにつくられている。彼女は両親を救った。そのことの達成に、彼女は、ないし、この映画の世界全体は、無関心なのである。

彼女が両親を救ったという達成に、彼女も、映画の世界全体も、無関心。これが「無償性」と加藤が呼ぶもの。たしかに、そんな映画のつくりになっている。「救い出してくれてありがとう！」もないし、「お姫様になって幸せに暮らす」もない。

⑤ 【読解問題1】そのことが観客に知らされるのは、現実の世界と異世界の通路であるトンネルを主人公親子が通過する二度の場面によってである。映画のはじまりで、遠くの町から引越してきて今度転校生として新しい学校に入らなければならぬ千尋は、一〇歳。思春期手前の年頃の女の子で、逆境に弱く、わがままで引っ込み思案そうに見える。ちよっとした父親の好奇心から、彼らが、いまは見捨てられたテーマパークの跡地に家族三人で入っていく、冒険近くのトンネルのシーンがある。ここでは、先頭をしっかりと歩む父の背後で、心細そうに母の手にすがりつく千尋に、母が言う、「そんなにくっつきかなくてよ、歩きにくいわ。」ところで、それと同じシーンが、千尋が両親を救い出し、家族三人が異世界から現実世界に帰ろうと再び同じトンネルを歩く最後近くのシークエンスで、反復される。そこでも彼女は心細そうに母の手にすがりつく。そして両親の後ろを心許ない足取りで歩いていく。

気づいていたかな？ 諸君。

⑥ この二度のシーンの反復は、ほぼ完璧である。しかしそれだけではない。興味深いのは、作者の宮崎駿が、その制作ノートに、この帰りのトンネルのシーンは、冒頭のシーンと完全に同じものとする、と断っていることだ。あたかも「油屋」の異世界での経験は、誰しもみな夢だったかのように。しかし、彼女の経験が夢だったわけではないことも、宮

崎は映画のなかに織り込むことを忘れない。映画は、そのあと、長い時間が経ったようにいまや多くの落ち葉に覆われた彼らの車のある場所まで家族が帰りつくシーンで、千尋の頭に銭婆からもらった「髪留め」が一瞬光る場面を挿入する。この場面によって、彼女の異世界での冒険が現実起こったことであることを、観客に告げ知らせるのである。

現実には、ある変化が起きたにもかかわらず、当人たちはそのことを意識していない。そういう作りをする、と作り手は考えている。これは何を意味するのか。

【読解問題1】「そのことが観客に知らされる」とあるが「そのこと」とは何か、また、どのように知らされるのか、説明せよ。

「そのこと」の内容は、直前「彼女は両親を救った。そのことの達成に、彼女は、ないし、この映画の世界全体は、無関心」であることだ。「どのように知らされるのか」は、異世界に入るときと出るときをともに同じように「千尋が心細そうに母の手にすがりつく」シーンとして描くことによつて。

【解答例】千尋は両親を救うが、その達成に、彼女自身も、この映画の世界全体も、無関心であることが、異世界に入るときも出るときも千尋が心細そうに母の手にすがりつくシーンが描かれていることによつて知らされる。

⑦ さて、もし、これがデイズニーのアニメであれば、どうだろうか。

⑧ 作中、千は、さんざん油屋のなかで苦しい労働に従事した末、同じように不当な扱いに苦しむ仲間を糾合し、最後、銭婆と——九・一一以後のジョージ・ブッシュ政権のように——「有志連合」を組み、この世界を支配する湯婆婆に立ち向かい、この世界の暴政を正し、そのうえで両親を救出するのではないだろうか。中東を舞台とするハリウッド映画の多くがそんなプロットで横並びを見せている。「テロリストと正義の味方」とからなる映画たち。そして、そうしたアニメであれば、この世界から立ち去るこのトンネルの場面では、必ずや、すっかり成長し、たくましくなった千尋の姿が観客の前に示され、彼らに強く働きかけ、彼らの心を動かそうとすることだろう。

問い「デイズニーのアニメであれば、どうだろうか」↓答え「「有志連合」を組み、この世界を支配する湯婆婆に立ち向かい、この世界の暴政を正し、そのうえで両親を救出。すっかり成長し、たくましくなった千尋の姿が観客の前に示される」。

⑨ しかし、宮崎はそうはしない。湯婆婆の支配する世界は揺るがず、千尋は両親を救出するが、両親もそのことを知ることはなく、千尋自身、そのことをどう思っているのか、観客にはわからない。しかもその映画に、私たちは心を動かされる。ハリウッド的な映画

よりも遙かに強く。なぜなのだろうか。

再び、問いが立つ。一見わかりにくい、この筋立てに、しかし、大変な数の観客が引きつけられた。ただそのわけをちゃんと言葉にできなかったらうけれど。こういう見えないところを解剖していくのが、批評の醍醐味。もう一度、映画を観たい気持ちにさせてくれる。

⑩ いったんこのことに気がつくと、他にも、この映画のさまざまな特異点が目に入ってくる。

⑪ たとえば、この異世界には湯婆婆と銭婆という双子の姉妹がいて、二人は対立しており、湯婆婆が、この世界を支配している。一見するとそう見える。けれども、よく観察すると、この映画に、湯婆婆と銭婆が同時に登場し、相対峙する場面は、一度として出てこない。逆に、銭婆は、千に、私たちは二人で一人なのかもしれないね、などとやっている。湯婆婆と銭婆とは、本当は二人で一人の存在なのかもしれない。この世界はデイズニー式の善悪二元論の世界に見えて、けっしてそう簡単につくりになっていない。なかなか複雑。そう観客に感得させるように、このアニメ映画の異世界は構成されている。

「主人公が冒険に出て世界を救い英雄に生まれ変わる」という定番ではないことに気づいたら、今度は、「善と悪が対立している」図式にも疑問符がつくことに気づく。一見そうだけど、という作り方は、その一見したところ、そう見えなくもない「主人公が冒険に出て、悪から世界を救い、英雄に生まれ変わり、去って行く」ストーリーとして鑑賞する観客も受け入れるという懐があることを意味している。そう観る人はそう観てもいい。でも、よく見ると「なかなか複雑」。もう一度、DVD買ってゆっくり観ようか、という人も出たりして、なかなか商売としてもいいんじゃない？ 繰り返し観たい映画、繰り返し読みたい本、ついでいいよね。

⑫ また、この世界と彼らの入り込む異世界との関係も、一筋縄ではない。ふつう、このような異世界譚の場合、人は異世界に入り、再び現実世界に戻ってくる。これが、「目が覚めたら、夢だった。」という形をとることから「夢落ち」と呼ばれる異世界ものの物語構造の定番である。しかし『千と千尋』では、千尋親子が先のトンネルを出て現実世界に戻ると、そこは彼らがもといた世界とは、どうも同じではない。浦島太郎の場合のように、戻ってみると、こちらの世界は、もう何年も経ったかのようなからだ。車は落ち葉に埋もれ、入り口の双面の人面像は、もうすっかり減ってしまっている。しかも先の「髪留め」が示すように、異世界での話は夢だったのではない。つまりそこでの関係は、異世界(B)がただのデイズニー的異世界ではないだけでなく(B(ダッシュ)、帰りつく世界(A)ももとの世界とは少し違うのだ(A(ダッシュ))。そこでの構造は、定番の「A—B—A」ならぬ、「A—B(ダッシュ)—A(ダッシュ)」なのである。

もう一つの特異点の指摘。現実↓異世界↓現実(定番)、ではなく、現実↓異世界(非定番)↓現実(元とは違う)。

芥川の「羅生門」を読んだとき、「羅生門の二階は異世界」という指摘をしたグループがあったけれど、あれも、「A—B—A」構造の物語やね。ただし、下人は変化する。が、善が悪を倒すのとは逆に、普通の青年が悪を獲得する。

⑬ なぜ宮崎は、このように物語をつくっているのだろうか。

⑭ 彼は、最初からプロットを厳密につくり、それに従って物語を展開するタイプの作者ではない。その物語は、細部をつくり出しながら、ためつすがめつしつつ、徐々に制作の過程のなかからつくり出されるという。だから、先の養老孟司との対談で、右に引いた発言の前後に宮崎の言う、こんな言葉こそが、その答えなのだ、と私には思える。

⑮ 彼は言う。この映画のきっかけは、たまたま、一〇歳くらいの子もたちがいるのを目にしたことである。このとき、自分は、彼らに対し、いま、何が語れるだろうか、と考えた。最後には正義が勝つ、なんて物語を語ろうなどという気にはさらさらなれなかった。そうではなく、「とにかくどんなことが起こっても、これだけはぼくは本当だと思おう、ということ」、それを語ってみたい、と強く思った、と。

問い「なぜ宮崎は、このように(正義が勝つ式じゃない)物語をつくっているのか」↓  
 答え「一〇歳くらいの子もたちに、とにかくどんなことが起こっても、これだけはぼくは本当だと思おう、ということ」を語ってみたい、と強く思ったから」。

さて、ここで私たちは、今度は、自分自身で問いを保っておかなくてはならない。「これだけはぼくは本当だと思おう、ということ」を語るためには、なぜ、定番を崩す必要があるのか。主人公に変化のない、善悪のきれいに分けられない、世界が元とは変わってしまう物語にする必要があるのか?」。

⑯ ここから話は、離陸する。

⑰ 私は、この「とにかくどんなことが起こっても」、そして「これだけは」という言葉のなかに、宮崎の戦後人としての根本の姿勢が現れている、と考える。

⑱ そしてそこに働いているものを、敗者の想像力、と呼んでみたいと思うのである。

「戦後人としての根本の姿勢」って? 「敗者の想像力」って? 宮崎駿は、一九四一年生まれ。この年は、太平洋戦争が始まった年。敗戦時満四歳。

⑲ 『千と千尋』で、宮崎は、どんな一〇歳の女の子の物語を一〇歳の子もたちに示したことになるのだろうか。むろん、いろんなことが言えるに違いない。しかし、先の観点にそって言えば、答えは、こうなのではないか。

この問いは⑬段落の問いの反復。答えが続く。

⑳ 世界には不正がある。しかしいつどんな場合でもそれを覆し、是正できるとは限らない。とはいえ、だからといって何もできないわけではないし、何をして無駄だということでもないし、何もなくてもよいということでも、ない。できないことがある。しかし、その限られた条件のなかでも、人は成長できる。また、「正しい」ことを、つくり出すことができる。

「先の観点にそって言えば、答えは、こう」、「何もできないということではない。何もなくていいということではない。成長や正しさを生み出すことはできる」。

なぜ、こういう答えになるのか。

・ 千尋は、奴隷の境遇に落ち、厳しい試練にさらされる。そこで自分を見直し、強くなる。自分を慕うさらに弱者であるストーリーカーのカオナシを見捨てることなく、しっかりと導き、銭婆の家に連れていく。そして、湯婆婆の支配する世界はそのままに、この歪みある世界の秩序を受け入れるのだが、しかし、そこで成長し、自分の名前を取り戻し、両親を救い出す。

映画に重ね合わせれば、こういうことになる。確かに、千尋は、何もできない、といい、何もしなかったのではなかった。すつきり悪を倒す力はないが、彼女自身は成長し、大切な人を救い出す。

・ ふつう、こういうことは、十分に正しいこととは言われない。なぜなら、そこに「不正」と「悪」があれば、それに抵抗し、これを打破し、「正義」の世界を打ち立てることこそが、「正しいこと」だとされているからだ。しかし、それは【読解問題2】「正しいこと」のすでにつくりあげられた見本の物語にすぎない。これを行うことができるのは、つねに「正しき」を行える境遇に恵まれた少数者たちだけである。しかし、人はいつもそんな幸運に恵まれるわけではない。逆に、こうした強者また勝者の「正義」の物語にとりつかれてしまっているから、敗者あるいは弱者のうちの少数の人びとは、テロに走るしかなくなっている。また、「不正」の前に「正義」をただせないからと、必要以上の無力感にうちひしがれ、希望を失っているのでもある。

「正義」とは、強者また勝者の「正義」の物語、である。例えば、アメリカの。アメリカのように、「不正」に対して「正義」で立ち向かえない場合、一つは「テロ」というやぶれかぶれ、一つは無力感に沈むしかない。アメリカのようになれないから? アメリカのようにならなくちゃいけないのか?

・しかし、翻って考えてみよう。「正しさ」とは何だろうか。それは、人が生きる場面のなかから、その都度、「これしかない」というようにして掴み取られ、手本なしに生きることを通じて、つくり出されるものなのではないか。強い立場の人びとの「正義」の物語をお手本にするよりも、新たに自分たちの「正しさ」を模索することのうちに、「正しさ」の基礎はあるのではないか。また、そのことのうちに、本当の成長も兆すのではないか。そしてそのとき、その成長は、あのお手本としての、いわば勝者の物語であるデイズニー式の「成長」物語とは、ずいぶん違うものとなるのではないのだろうか。

【読解問題2】「正しいこと」のすでにつくりあげられた見本の物語」とあるが、「見本の物語」とそうでないものについて、筆者はどのように考えているか。

★傍線部を延長すると、「それは」とあり、その指示内容は、「そこに「不正」と「悪」があれば、それに抵抗し、これを打破し、「正義」の世界を打ち立てること」である。これが「見本の正義の物語」。そうでない「正しさ」については、次の段落に、「人が生きる場面のなかから、その都度、「これしかない」というようにして掴み取られ、手本なしに生きることを通じて、つくり出されるもの」とある。

【解答例】正しいことの見本の物語とは、強者が不正や悪に抵抗し、戦い、勝利するといふ（デイズニー映画のような・現実とかけ離れた・作られた）ストーリーだが、筆者はそうではなく、弱者であっても、手本なしに生きる中で、その都度、「これしかない」という形で掴み取り、作り出していく正しさにこそ正しさの本当の基礎があると考えている。

・デイズニー式の成長とは、子どもが大人になることだが、それは大人から見られた成長である。たとえば米国のマージョリー・K・ローリングズの『子鹿物語』（一九三八年）。そこでは、主人公が、可愛がってきた子鹿が成長し、畑を荒らすようになったころ、その子鹿を撃ち殺さなければならなくなる。そこでは、自分で可愛がり、育ててきたものを、あるとき、撃ち殺すことが、大人になるということ、成長することの意味であり、その通過点である。しかし、いつも人は、そのようにしか大人になれないわけではない。それは、一つの大人になる物語の典型であって、子どもたちにたいする、一刻も早く、試練に遭い、克服し、大人になれ、という促し、急ぎたてでもある。それは、子どもから見れば大いなる抑圧ともなる成長観に立つ、極めて近代的な成長の物語の範型なのである。

・しかし、むしろ、子どもは、そんなふうにはなくとも、成長できるし、成長をする。社会の認める大人になるというのではない、むしろ、もう子どもではなくなる、という子ども自身にだけわかる、別の仕方だ。

ふたつの成長。デイズニー式の成長Ⅱ大人から見た成長、一刻も早く、試練に遭い、克服し、大人になれ、という促し、急ぎたてる成長。子どもから見れば大いなる抑圧ともな

る成長。極めて近代的な成長の物語。学校も基本、こっちやね。そうでない成長Ⅱ社会の認める大人になるというのではない、もう子どもじゃない、と自分自身にだけわかる成長。

「大人になる（社会的になる）」と「子どもではなくなる」は、別のことだという指摘は深い。これは、みなさん覚えておくといい。社会的人材にはなっているように見えるけれど、子どもの部分が残存しているというのもありうる。

・たとえば、西原理恵子の【読解問題3】『ぼくんち』（一九九八年）。これは、そういう別の仕方での子どもの成長がありうることを描く、敗戦国にでなければ現れないような敗者の想像力にみちた漫画だ。そこには二人の兄弟、一太とその弟、二太が出てくる。一太は、売春などとして二人を育てるかの姉さんを助けようと、一日も早く大人になろうとし、不良仲間に入り、トルエン密売などに精を出す。兄貴分に殴られ、足蹴にされても歯を食いしばって、がんばる。そして最後、行方不明になるのだが、残された弟の二太は、気がつくとも、自分がもう子どもではいられないことを知り、別の仕方、子どもではなくなることを受け入れる。

「別の仕方」とは、一太のようにではなく、という意味だ。一太は、その世界の強者になるべく、がんばる。生きるために。筆者が「敗戦国でなければ」という意味を重ねると、この一太は、生きるために戦争を仕掛けていった日本、そして、負け、「行方不明」になったかつての日本を思わせる。となると、二太の「別の仕方」は、また、日本の別の仕方での、大人になる仕方を示していることになる。

・一人、かの姉さんとも別れ、よそから小さな船でやってきたおじいさんにもらわれて町を出ていく。甲板のうえに立っていると、やがて自分の町が見えなくなる。寒いからなかに入れ、とおじいさんに言われると、二太は言う。

「じいちゃん。ぼく知ってるんで。」

そう言い、ふり返り、

「こうゆう時は笑うんや。」

・そして漫画は、この二太の振り返った笑顔で終わる。

・正しさについても同じだ。この世にはさまざまな不正がある。すぐにはただせない「悪」もある。けれども、この世の不正をただすことができないままに果たされる、それと同じだけ大きく、深い「正しさ」もある。あるはずだ。

「この世の不正をただすことができないままに果たされる、それと同じだけ大きく、深い「正しさ」とはどんなものだろうか。」

不正をただす、不正と闘い、不正を倒し、自分が正義になる。大日本帝国は、天に代わって不義を討とうしたが、敗れる。では、正義の戦争に勝利したアメリカ合衆国は、正義

の名の下にベトナムで、湾岸で、イラクで、世界のあらゆる場所で多くの人々を殺し続けている。

・宮崎駿は、一九四一年に生まれている。彼は敗戦国の日本のなかで、このような考えを育てている。

強者になれなかった、敗者として、それでも正しさを探ろうとするとき、どんなあり方があるのか。最後は正義が勝つストーリーなんて、作らねえ。そういう宮崎の思いを、敗戦国の息吹の中で成長した宮崎自身の大人のなり方と、加藤は重ねてみせる。

「この世の不正をただすことができないままに、それでも日々生きていく中で、これだけはほんとうだという意味の正しさを捉えること」。

・『千と千尋』が、日本だけでなく、世界の多くの国で人びとに受け入れられたのは、この、もう一つの「正しさ」、そして「成長」の物語が、宮崎のアニメ映画のうちに示されていたからではないだろうか。そしてそれは、勝者のドラマトゥルギーにほかならないデイズニー式とは異なる、いわば敗者の想像力の所産であることで、世界の各国の人びとだけでなく、米国の人びとの心にも、深々と浸透したのではなかっただろうか。

米国の人々にも？ そうじつはそうなんだ。

・人びとは、一刻も早く大人になるよう急かされてきた。けれども、そのためにいま、どんなに多くの大人たちが、そのことから来た傷を抱えているだろう。『千と千尋』は、そうした近代の物語に対する、一つの説得的な反措定であることでまた、世の多くの人びとの心を捉えているのである。

勝利者アメリカ合衆国も病んでいる。「一刻も早く大人になれ」という要求は、かの国のほうが苛烈だろう。そして、もはや世界の警察役からも降りたいといっている。それは、全世界を覆った「近代」の帰着点にある、もう一つの問題である。

千尋は、見た目には、始めと終わり、母に同じ仕草をする。母には同じように見えるけれど、彼女にだけわかる何か今までは違う自分のあり方を観客も感じ取るわけだ。それは『ぼくんち』の二太にも共通しているはずだ。

**【読解問題3】**『ぼくんち』の結末部分によって、筆者が示そうとしたことは、どのようなことか。

問いを立て直す。「こうゆう時は笑うんや。」とはどういう笑いか。「こういうとき」って？ なぜ笑う？ このように問いを解きほぐす技を覚えてほしい。ふつう、笑うところ

- 9/10 -

じゃないよね。姉からも兄からも（その前には親からも）離れ、一人知らない人にもらわれていく。でも、彼は、子どもには言えないせりふをいう。

「こうゆう時は／笑うんや。」これを言い換えるのが私たちの仕事。

こんなとき耐えがたい現実があつて、それでも生きていこうとするとき、笑うんや自分の面倒を見てくれる、このおじいちゃん生きていく道を、積極的に受け入れるんや。筆者は、この漫画を、千と千尋と重ねるようにして置いている。初めにあつた次の部分を思い起こそう。

「彼女がさまざまなことを経験し、課題をクリアし、達成する。しかしそれが彼女の「成長」あるいは社会から「賞賛」されるべき物語に結びつかない。その無償性の問題が、この作品に固有のある見えにくい「感動」の源泉としてある。」

これを、二太と重ねることで、答案を綴ってみよう。

**【解答例】**耐えがたい現実の中でさまざまなことを経験する中で、その都度これは本当だということを手放さずに生きていけば、現実の方は変わらなくても、その現実を受け入れていくことができる存在に成長していくということ。

「現実を受け入れる」は「受け入れたり、少しずつ変えたりする」としてもいいと思う。

**■読解問題**

- 1 「そのことが観客に知らされる」とあるが「そのこと」とは何か、また、どのように知らされるのか、説明せよ。
- 2 「正しいこと」のすでにつくりあげられた見本の物語」とあるが、「見本の物語」とそうでないものについて、筆者はどのように考えているか。
- 3 『ぼくんち』の結末部分によって、筆者が示そうとしたことは、どのようなことか。

**■発展問題**

●筆者の、「大人になる（社会的になる）」と「子どもではなくなる」は、別のことだという指摘について、あなたの考えを述べなさい。

●重要語「物語」 Ⅱ文字通りの物語以外に、評論などでは「アメリカはアメリカの物語を生きている」といったように、その主体が作り上げた世界のことを指すことも多い。